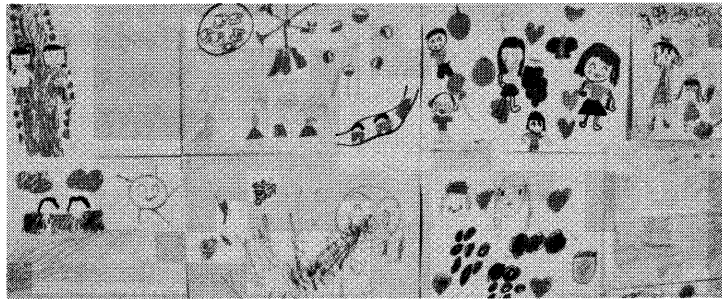


イベント報告

5月イベント『知ろう・行動しよう』

—未来を築くための子どもの権利条約—



5月16日(日)に子どもたちが企画・運営をしたイベントを早稲田大学で行いました。企画者の子どもたちが『生きる権利』『参加する権利』『守られる権利』『育つ権利』の4つのテーマにそった紙芝居を事前に作成。イベント当日はその最後の1ページの絵を子どもから大人まで、世をこえてみんなで知恵や意見を出し合って完成させました。イベントには学生など約40名が参加してくれました。

子どもの権利条約ネットワーク(NCRC)は、創立以来、毎年5月に子どもの権利条約を普及するため、また子どもの意見表明・参加の実践の場として、『五月イベント』を開催してきました。1999年から2005年までの7回は子どもが企画、運営をしました。NCRCが提供するの会場と経済的負担、広報だけで、テーマもプログラムもすべて応募してきた子どもたちが決めて行くというチョット無謀にも見える企画です。

昨年は条約の採択20周年を記念し、これまでの『五月イベント』を企画運営してきたかつての子どもたちの今を語ってもらいました。そのイベントを通して、かつての子どもたちから、学校や家庭以外に自分が活躍できる場があったこと、そして親や先生以外の大人との交流がその後の自分に大きく影響したという声が多く聞かれました。そして今も自分の能力

を発揮する場がなく、自分の力をもてあましている子どもたちは沢山いる、だからもう一度子どもの企画するイベントを再開してほしいという要望がありました。それらの声にこたえるために重い腰を上げ、今年は5年ぶりに企画者を募集し、子どもたちが作り上げる『五月イベント』を再開することにしました。5年のブランクの後で、企画者が集まるかどうか不安だったのですが、昨年のイベントに参加していた一人の中学生が自分一人でもイベントを実行したいと応募してきました。

最初は中学生の男の子2人でスタートしたのですが、途中から参加を希望する子どもも出てきて、最後は12歳から17歳までの男女8人で企画を進めて行きました。最初からはじめた子どもたちと、途中から参加した子どもたちの意見が合うかどうか、イベントに対する気持ちの温度差が埋まるのか

NEWSLETTER No.100 CONTENTS

イベント報告

- 5月イベント『知ろう・行動しよう』
—未来を築くための子どもの権利条約— /1
・イベントを企画・運営した子どもスタッフから /2

子ども・若者の意見表明・参加の動き

- 高校生の声を教材に!
—セーブ・ザ・チルドレンと高校生国際ボランティア団体
WITHとの協働教材開発— /4

○ユースプロジェクトすぎなみ

「オーダーメイドスクール」 /6

○“子どもによる子どものための活動”が日本で10周年

—活動 最初の一步 /7

お知らせ

- 速報 国際社会から見た日本の子どもの権利条約の実施 /8
- 国連子どもの権利委員会審査報告会 /8

どうかという心配を抱えてのスタートでした。

今年のテーマは『絵』です。絵は年齢を超え、人種を超えたコミュニケーション手段であるという観点から、意見の伝達手段として絵を使おうという企画を、最初に参加してきた中学生が提案しました。絵を通して条約を普及し、子どもの現状を訴え、それに対して自分たちにもできることがあるということを伝えたいというのです。後から参加した子どもたちもすんなりとこの企画を受け入れ、どのように絵を通して意思を伝えるかの企画会議が積み重ねられていきました。

一体どんな方法を取るのかしらと思っていたら、昔懐かしい紙芝居を作るということでまとまって行きました。伝えるテーマは条約の4つの柱『生きる権利』『参加する権利』『守られる権利』『育つ権利』に決まりました。各自、自分のやりたいテーマを取り、2人ずつグループになって制作を始めました。もうひとつの企画として、同時に日本中の子どもに絵を描いてもらって展示したいというのです。絵を集めるために新たにチラシを作成し、絵の募集も同時並行で実施しました。

はじめのうちは企画会議といっても、自分達のおしゃべりが半分、議題に集中しないし、動きまわるし、とても会議と言えるような状況ではありませんでした。私にどうしたらよいか聞いてくる子どもたちに、自分たちの意見を表明するのだからすべて自由に企画するようにとその都度言わなければなりません。一体どうなるのかしらと内心不安になっていたのですが、紙芝居という伝達手段を決めた所から、彼らの様子が変わってきました。制作を始めると、参加者に伝える情報が正しいかどうかインターネットで検索したり、調べた情

報にショックを受けたり、少しずつ変わっていきました。自分の置かれている状況を、条約に照らし合わせて表現し、問題提起をした子どもがいたのですが、彼も自分の考えを掘り下げながらとても素敵な紙芝居を作り上げました。描くことに集中し、絵なんて描けるかなと言っていたことが嘘のように、それぞれテーマを深めながら、夢中になって絵を描いています。最後に読み合わせをしている彼らはそれまでとは別人のようでした。自分たちで当日のプログラムを作り上げ、役割分担を決め、準備完了です。毎週日曜日に自由が丘の事務所に集まり、10回の会議を経ての結果です。

募集した絵はギリギリまで集まらなくて、どうなる事かと子どもたちも心配しましたが、色々な方の協力をいただいて、結果的に沢山の絵が集まり、会場に展示することができました。当日の参加者は企画者を含め40人。グループに分かれての話し合いも盛り上がり、参加者の大人たちも久しぶりに絵を描いて自分を表現しました。最後にそれぞれのグループが紙芝居の最後のページを発表し、参加者全員で話し合いの結果を共有してイベントを終了しました。

子どもたちのエネルギーに圧倒され続けた数ヶ月でしたが、私が得たものは沢山ありました。子どもを「待つ」ことの「大変さ」と「大切さ」。子どもの心は深いところにあって、日常の言葉や態度に隠され、なかなか見えないけれど、大人はいつもその深いところを見る努力をしなければならない事など、忘れかけていた感覚を思い出させてくれました。企画をした子どもたちが大人になった時、このイベントのことを思い出してくれたら嬉しいです。 赤池 悦子(NCRC事務局長)

～このイベントを企画・運営した子どもスタッフから～



このイベントの企画には、一番最初から参加していて、途中いろいろ悩んだり、論議したり、時にはテーマ自体受け入れてもらえないんじゃないかと思ったときもありました。しかし、現にイベントをやったとき、進行や紙芝居がちょっとつまずいたところもありましたが、参加した皆さんが満足していた様子で、ほっとしました。紙芝居も自分が思った以上に好評でよかったです。最後の1ページをグループで相談しているときはだいぶ悩みましたが、最後には皆さんがよい解決策を出してくれました。これが今後の活動につながればいいなと思います。展示している絵も、結構ぎりぎりまで届かなかったりしたので、ヒヤヒヤしていましたが、当日にいっぱい絵がはられているのを見て、とてもうれしかったです。イベントの始まる30分ぐらい前に絵を描いて、加えてはらせていただきました。とにかく、イベントは予定よりも早く終わりましたが、とにかく成功してよかったです。来年は今の状況から見て参加するのは困難だと思いますが、また余裕が出来たら、ぜひ参加させて頂きたいと想います。

湊谷 康司(15歳)

なんかの会議で生きる権利をすることになりました。どこの国にするのかまよいました。

それをすすめること2回目、集合する時ひらめきました。水

や学校、いろいろなことが頭にでてきました。そして湊谷君(一緒にやる人)にいいました。湊谷くんは「いいね」とひとこといって、参考にしてくれました。そのときたんに頭に出てきただけで参考になると思いませんでした。すごくうれしくなりました。そして3回目、絵を描くことをすすめました。心の中で「ヤバイ、おれって絵かけないじゃん」てさげびました。湊谷君にたのんだらOKしてくれました。湊谷君のしょうらいの夢はマンガ家らしく、とても迫力のある絵を描いてくれました。これならほかの人にもつたわるだろうとうなずきました。絵もかんせいして、話もかんせい、もう何もいうことなくしました。

そして、ほんばん。川子会(川崎子ども会議)のメンバーも来てきんちょうしてくる自分。

そのまま緊張してるとき、自分の番がきました。よし、この調子だとうまくいけよう、そう思った時、よそうがいなことがありました。湊谷君に「来ないで良いよ」と言われショックをうけました。ひまな時間がのびる。そういう時間がながかんじ、寝ようかふざけるか考えました。でもフラフラしたらもっとろんがいなことがおきると思い、じーっとまっていた。 高野 郁己(14歳)

初めに権利条約の話聞いたときに、とてもむずかしく、大変だということを予想し、参加してよかったのか、わるかった



のか、帰りのときに考えました。しかし、答えは出ずに第2回をむかえました。第2回では、参加人数がまた一人増え、話の内容が第1回より大変になり、少し他のことを考えると、なにを話しているのか分からなくなり、他の参加メンバーの人に話の内容が分かっているのかを聞かれ、そのときにちょっとごまかしていました。しかし、少し聞いて、聞こえなかったところの内容が少しだけでも分かりましたが、でも、その話のおわりのときには、話の内容の4分の1ぐらいしか分からなかったが、帰って少し考えて話の内容が分かったのが4分の1から4分の2ぐらいに変わり、その後、だいたいこういうことが続きました。

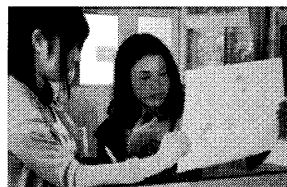
そして、その後、少しずつ人数が増えましたが、最初のときには人数の人たちよりは少なく、いろいろ大変でしたが、おわりのときには、みんなで協力できて、少しずつ完成してきました。そして、本番では、せいこうして、みんな、よるこんでいるようで自分もよかったと思います。しかし、今でもこのきかくに参加してよかったのか、わるかったのか、いまだに、答えがでないままです。でも、みなさん、ありがとうございます。

鈴木 恭啓(13歳)

私は、3回目くらいから本格的にこのイベントの企画者になったのですが、最初は案もまとまらずとても大変でした。徐々に企画メンバーも増え、当日、自分が考えていたよりも多くの人が会場に足を運んでくれ、イベントできたことがとても嬉しく思っています。今回のテーマは『知ろう。行動しよう。』会場に来てくれた人には各グループの条例の紙芝居でなんとなくは知ってもらえたと思います。世界共通言語は『絵』ということで、今回は紙芝居をやったのですが、紙芝居で何かを伝える。ということはやったことがなかったので、企画中はとても苦労したし大変でしたが、たくさんの人に理解してもらえるような紙芝居にはなっていたと思います。紙芝居の解決策の最後の空白の1ページをみなさんに考えてもらう話し合いでは、年齢層も様々、意見も様々、初めて会う人たちとでしたが、私のグループの『参加する権利』についての議論は、一人一人たくさんの意見を言い合いましたが、結論、解決策にまとめるのが難しく、みんな本当に真剣に考えてくれました。自分の普段の生活の反省というか、自分の気持ちの整理とか大人になってもこうしたらいけないなあ…とかその話し合いだけでも、本当に色んなことが学べて、ますます色んな人たちに子ども権利条約について知って、考えていい未来を築いて欲しいなあとも思ったし、こういうイベントの場などが増えたらいいなと本当に思いました。このイベントを通して学んだことは、知ってもらうことの難しさです。私たちが少しでも多くの人に、子どもの今の現状や条例を知ろうとこういうイベントを企画し、知っている人ではなく、知らない人へと輪を繋ぐ難しさもとても学びました。でも私が、今こうやってイベントを企画し、輪を広げようとしていることが第一に大切なんだということも知りました。未来は子どもが繋いでいきます。今の子どもの不安などを条例は守ってくれています。この条例を知り、少しでもたくさんの人が明るい未来を切り開けるといいなと改めて思いました。このイベ

ントは、私にとって、とても素敵な経験になりました。このイベントをきっかけに少しでも『知る』ことの輪が広がっていることを私は願います。

亀山 優(17歳)



最初は、めんどくさかったけど、皆とやっていくうちにだんだん楽しくなってきました。途中、絵がうまく描けなくて、諦めてしまったけど、赤池さんの励ましの言葉でうまく描けました。その時はとても嬉しかったです。でもやっていくうちに、だんだんと不安になって、上手く喋れるかなー？しっばいしたらどうしようと思っていました。でもイベントの前に練習したりしてたので、そのせいかちゃんとイベントでは出せたと思います。

準備しているうちに本とかでは全然わからなかったことがこのイベントに参加してわかったり、いろいろな大切な事を学んだりしました。イベントで学んだ事をこれから活かせられると良いなあーと私は思いました。また機会があったら、こういうイベントなどに沢山参加していきたいと思っています。今回のイベントはメッチャいい会になったと思います。

牛沢 みゆき(12歳)



私は5月イベントに来場者としても、企画者としても出たことがなく、しかも、イベントの企画会議の第3回目から参加したので、いまいち内容がつかめず、みんなは何をしたいのか、自分が何をすればいいのかわかりませんでした。でも、何回か参加している内に、どんな風にするのかがなんとなくわかってきて、自分も何に関心があるのかがわかり、どんな事をすればいいのか、何を伝えればいいのかが決まり、その時は少しホッとしました。

私は条約の4つの柱の中で、育つ権利を選びました。なぜこれを選んだのかというと、日本ではほぼ当たり前のように守られていますが、世界の貧しい国では、学ぶことも、遊ぶこともできず、毎日毎日働いている子どもがいる事を聞いたことがあったからです。でも、その事を紙芝居にするのに一苦労しました。

イベント当日、思っていたよりも人が来て、とてもうれしかったです。話し合いの中で、自分が言いたい事をうまくみんなに伝えることが出来なかったのですが、周りの大人の人も話をまとめられるようにしてくれたのでとても助かりました。

このイベントを通して、子どもの権利条約を伝える難しさと、一からの企画の難しさがわかり、このイベントに企画者として参加してよかったと思います。

本間 政規(15歳)

私は4月中に集まってイベントの会議をしました。私は育つ権利について話し合いました。

私は本間君と一緒にやりました。5月のイベントに参加して第31条について発表をしました。感想は、会議中は遊んでいたけれど、本番は、遊ばずちゃんとやり遂げることができました。来年も参加したいです。

高橋 司(14歳)

高校生の声を教材に！

～セーブ・ザ・チルドレンと

高校生国際ボランティア団体WITHとの協働教材開発～



村田 幸代 (社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 教材開発担当)

セーブ・ザ・チルドレン（以下、SC）は、子どもの権利条約を理念に活動する国際NGOである。現在、世界で29カ国のメンバーが子どもの権利の実現を理念に、教育、食糧支援・保健栄養、子どもの搾取と虐待防止、紛争と災害への緊急援助などの多様な分野において、120カ国以上で活動を展開している。セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（以下、SCJ）は2003年から日本の子どものための事業“Speaking Out ～みんなで話そう～”を開始し、その一環として、子どもの権利に関する教材を開発・制作している。今回は子ども参加に基づき、高校生国際ボランティア団体WITHとの協働教材開発について報告したい。

2008年12月、関西最大規模の国際協カイベント“ワンワールド・フェスティバル”。それが、SCJと高校生ボランティア団体WITHとの初めての出会いの場である。当時、WITHの代表を務めていた高校3年生から「何か一緒に活動しませんか？」という積極的な提案を受けた。

WITHは、“国際”や“ボランティア”に興味をもつ高校生によって2008年に立ち上げられた国際ボランティア団体である。所属しているメンバーは全て高校生であり、団体の運営管理を行いながら、大阪を中心とした近畿圏で活動している。WITHは、同年代の子どもたちに希望を与えたいという思いを理念に、①『国際』『ボランティア』に興味を持つ高校生の『きっかけ』を作ること、②活動を通して成長すること、③自分たちで伝えていくことを目指し、活動をしている。そんな活力にあふれた彼/彼女らとの出会いが、協働教材開発のきっかけとなった。

SCJはこれまで、日本の子どもが子どもの権利の視点を持ち、意見表明していくことを目的とした“Speaking Out ～みんなで話そう～”を展開してきた。2008年秋から2009年春にかけては、SCJがメディア・リテラシーの手法を活用したワークショップを実施し、参加した小学校高学年から高校生が「私にできること」をテーマに自分たちのメッセージを映像化し、ウェブで発信する“Child to Publicキャンペーン”を実施。現在も2005年度から続く“Child to Childプログラム”－子どもたちが、子どもの権利の視点から世界の子どもたちの状況を知り、自分のこと・世界のことについて他の子どもたちに伝えていくプログラム－を実施している。これらのプログラムは、参加した子どもたちのエンパワメントを促し、子どもの権利の一つである子ども自身の意見・思いを表現する機会の提供および促進を担ってきている。その

過程で、子ども参加の意義や重要性を実感し、プログラムや教材となるアクティビティ開発においてさらに子どもたちの声を反映させていくこと、すなわち子どもたちとともに教材開発をすすめていこうという思いが強くなっていった。

そして、2009年7月から冒頭の高校生から活動を引き継いだWITHメンバーとともに、協働教材開発を行っている。月に一度ミーティングをもち、子どもの権利の基盤となる子どものエンパワメントを促すアクティビティの実施および検討、修正を行っている。こうしたWITHとの協働教材開発は、SCJにとっても大人の役割や必要なスキルを考えていく機会ともなっている。そこで、この取り組みに参加している高校生とこの協働教材開発を担っているSCJの教材開発インターンの声を最後に紹介したいと思う。彼/彼女らの声は、今後子ども参加を実現していくための様々な気づきを示唆してくれるものであろう。

■参加している高校生の声

1) 私はSCJさんとの共同アクティビティを通じて今まで仲間の新たな一面を知れたり、自尊感情を高めることができました。

なかでも私が一番印象に残ったアクティビティは“もし～だったらゲーム”です。この時はメンバーを「クレヨンの色に例えれば何色？」というお題で一人ずつ色に例え、なぜその色を選んだかという理由とを一緒に発表しました。私について発表する順番が回ってきたとき、いつも私はメンバーを注意したり、自分の意見をはっきりすぎるぐらい言うところがあるので、メンバーには「怖い」などのマイナスのイメージで捕らえられているんだろうなと思っていました。しかし、メンバーの発表を聞くと「芯が強い、注意ができる、頼れる」など、想像していたこととは全く違うことを思ってくれていて感動したのと同時に、少しはこの性格にも自信を持ってもいいのかな、という感情になりました。このアクティビティでよりメンバーとの絆が深まったと思っています。

このアクティビティ以外にもSCJさんとの協働アクティビティは私にとって毎回充実したとても良い時間になっています。今後もSCJさんとWITH両方が気持ちよく、楽しいアクティビティにし、WITHが参加することでより良い教材になっていけば良いと思います。

太田 菜月（17歳）

2) 楽しいだけが遊びじゃない。遊びを通して自分を知るアクティビティがある。それを知ることによって僕の考え方は大きく

変わりました。協働企画当初は「SCJって?」「アクティビティってなに?」そんな疑問を持って始めた活動ももう半年以上がたち、その本質を理解していくと同時に大きな意味を感じます。

自分の事しか知らない人は自分の事も知らない。これが今までアクティビティに参加してきた僕の感じることです。SCJさんとのアクティビティの中で、自分を自分1人で探し知ることは、僕にとってすごく難しいことでした。けれど周りを見て、友達のことを知っていくと「僕はどうなんだろう?」とその時初めて自分を振り返ることができました。今まで自分を知るには自分とだけ向き合えばよい、と考えていた僕にとってはすごく衝撃的で大きな意味のあることでした。自分の目で外の世界をみて自分の心で自分を振り返る作業。この先も協働企画の中でその作業を続けていきたい。本気でそう思うことができます。

川端 稔一(17歳)

3)『子どもの権利』。このことを考えた機会は、この活動をさせていただく前までは全く考えたことがありませんでした。しかし、“子どもたちから世界を変え国際交流を広めていく”“大人目線ではなく子ども目線で世の中を見てみる”。今まで想像したこともなかったことを、SCJさんから教えてもらっています。

また、SCJさんが考案したアイスブレイクを実際に体験し、「子どもたちが行えばどう感じ取ってもらえるか?」「どうやってグループと心が打ち解け合えるのだろうか?」。SCJスタッフの方・WITHメンバーとともに考え、コミュニティーの方法や意見を話しやすい環境づくりなど、交流の場面において重要なことも学び、なにより団体の“絆”を育ませていただき、とても感謝しています。

子どもの純粋な笑顔はいつみても輝かしく、とても元気が出ます。しかし、その笑顔が世界中から徐々に失われつつある。僕はそんな気がしてなりません。だからこそ、SCJさんともに行っているアクティビティはとても意味のあるものであり、これからの世界でとても重要視されることだと、日々感じしております。月に1度しかない活動ですが、これからも『子どもの権利』について・子どもたちの笑顔について一緒に考えたいと思っています。

稲田 晃久(17歳)

4) SCJさんとの共同プロジェクトは本当に楽しく、月に1回しかないのがさみしいです。もっともっとSCJさんとアクティビティやアイスブレイクをしていきたいです。SCJさんとのアクティビティやアイスブレイクは楽しむだけでなく、いろんなことを学んだり、知ることができ、また時には私たちも知らないようなメンバーの一面を見ることができ新しい発見をしたようでワクワクが止まりません。

初めてこの協働教材開発に参加したときは、SCJさんどう接しようか不安だったのですが、向こうからどんどん話しやすい雰囲気に変えてくれ、今では同世代の友達のように話かけてくれるのでとてもうれしいです。私たちWITHが今度イベントを開く機会があれば、SCJさんのように自分から積極的に話しやすい雰囲気を作り、できればそこに今までやってきたアクティビティやアイスブレイクを取り入れていきたいと思いました。

そしてこれからはSCJさんの取り組んでいる『子どもの権利』についてももっと考えていきたいです。

芝前 一輝(高校3年生)

■SCJ教材開発インターンの声

～チャイルド・ファシリテーターとしての子ども参加活動～

私はWITHとの協働教材開発でチャイルド・ファシリテーター(以下CF)という役割を担っています。「ファシリテーター」とは会議やその他さまざまな活動の「促進役」を意味し、CFは特に子どもを対象にしたファシリテーターを指します。ゆえに子どもの特質や、子どもと大人の違いについての理解が必要です。そして大人とは違った側面を持つ子どもに寄り添うとはどういうことなのか、を自問自答していかなければなりません。CFとして活動する上で私が気をつけていることや感じていることを以下に述べます。

CFとして私が意識しているのは、どんな意見でもまずは受け止めること、“聴いているよ、あなたの話に興味があるよ”という姿勢を示すことです。このことが子どもたちに“話していい”という安心感を与え、“話したい”という欲求を生みます。具体的に私が心がけている行動はアイコンタクトを取りながらうなずくことです。また「へえ～」「そうなん!」と相槌を打ったり、「なんで?」「どのように?」と話を掘り下げる質問をしています。さらに、子どもが自分の意見を言語化することを“待つ”のも大切です。

私は最初のころ、“子どもの話に関心を持とう”と努力していました。しかし、CFとしての経験を重ねるうちにもっともっと高校生から意見や考えが聞きたくなってきました。なぜなら、私が知らない世界や斬新なものの見方を聞いてハッとさせられることがよくあるからです。高校生と5歳ほどしか変わりませんが世代間ギャップがあり、毎日が驚きや発見の連続です。

精神面では感謝の気持ちを常に持ち続けるよう心がけています。「ここまで足を運んでくれてありがとう」「たくさん発言してくれてありがとう」という具合です。さらに子どもをリスペクトする視点も忘れません。ミーティング内での発言や自分の意見をしっかり言おうとする態度に感心させられることが多々あります。特にWITHは国際協力を行っている団体であり、高校生であっても世界的な視点を持った彼らの発言や姿勢には心を打たれます。

当然ですが私のCFとしてのスキルはまだ発展途上にあり、改善すべき点がたくさんあります。例えば、途中で子どもの話を遮るのが難しく、会話が長引いてしまいます。その結果時間オーバーしてしまうので、タイミング良く、また子どもを傷つけることなく次の活動に移れるCFスキルを身につける必要があります。さらに子どもに関する理解を深めることも今後の課題です。子どもとはどういう存在なのか、どのように接していくべきなのかは、CFを続けていく上で不断の課題と認識しています。

坂田 のぞみ

社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

<http://www.savechildren.or.jp/>

<http://82.xmbs.jp/withivhss/>

ユースプロジェクトすぎなみ 「オーダーメイドスクール」

「オーダーメイドスクール」とは、自分が知りたい！やってみたい！人に伝えたい！共有したい！仲間・友だちを増やしたい！そういった思いを実現できる場です。中高生を中心に、いろいろな年齢の人々が自分の得意なこと、知っていること、知りたいことを他の人に教えたり、伝えたり、他の人から学んだりするために講師や参加者となり、講座を開いています。参加者の対象年齢は小学校5年生から25歳ぐらいまでとしました。

この企画は「ユースプロジェクトすぎなみ」という、杉並区在住・在学の中高生による委員会で、中高生を中心にみんなが「活躍」できることを目的に考え始めた企画です。私たちの『活躍』の定義は、自分にできることをして世の中をHAPPYにしようというものです。講師は人に教えたりすることで自信や達成感を得たり、参加者は教えてもらうことで新しい自分を見つけたり、次に生かしたり、活躍できるようになります。

今の世の中、『KY』などの言葉が使われ、周りに合わせて自分を抑える場面が多いと思います。空気を読むことは悪いことではないし、むしろ凄いことだと思います。ですが、自分を抑えることは大変だし、ストレスも溜まります。KYでもいいのではないのでしょうか。だから私たちは「オーダーメイドスクール」の中で『しゃしゃれ』（※でしゃばる、しゃしゃり出るの意）というキャッチコピーを使っています。みんなが自分を出せる。そんな世の中になったら、今よりもっと楽しく毎日が過ごせると思います。

3年前に発案し、検討を続けてきた「オーダーメイドスクール」ですが、21年度からいよいよ実行に移すことになりました。

「第1回オーダーメイドスクール」は平成21年7月26日（日）に阿佐ヶ谷中学校で開催されました。大学生や中学生の講師により、『Let's リフレーミング』『夏休みの宿題をやろう』『英語』『大学のあるきかた』『食品添加物の恐ろしさ』『座談会』『鉄道に親しむ』の7講座が行われ、計27名（小学生1名、中学生4名、高校生2名、その他8名、ユースメンバー12名）の参加がありました。

第2回目では参加者のニーズに応えられるよう、周りの友人からアンケートなどを取って講座を決定し、今年の3月27日（土）に高井戸地域区民センターで行いました。中学生から大学生までの講師による『Let's enjoy cheer!!!』『手話で話してみよう』『ホットヨガに挑戦しよう』『ギター』『体感音楽〜リトミックを通じて』『関東私鉄の現状について』といった講座や、座談会『ふれっしゅとーくwith ゆーす』の計7講座が行われ、33名（小学生3名、中学生6名、高校生8名、その他3名、ユースメンバー13名）の参加がありました。2回とも

参加者を楽しんでもらえ、大成功を納めることができました。

将来的には、今までの形式はもちろんですが、1日かけて行う講座など内容に幅を広げたり、参加者もこれまでの小学5年生から25歳ぐらいまでと限定せず、もっといろいろな年代の人々が関わられるようにしていきたいと思っています。「オーダーメイドスクール」は、人が集まれば集まるほど、たくさんの考えや興味のあることについてなど、多くのことを提供できる可能性があります。たくさんの人々の中で進化していく企画なのです。

ユースプロジェクトすぎなみ委員 三玉 枝梨佳

「ユースプロジェクトすぎなみ」は、杉並区内在住・在学の中学生から18才までの青少年が、杉並区が住みやすく、より良いまちになるために自分たちでできることは何かを考え、活動している委員会です。月に1～2回の会議や合宿などの活動を通して、青少年が意見表明や社会参画することの大切さを認識し、学んでいます。毎年3月には区長への提案を行っています。

「オーダーメイドスクール」は、ユースプロジェクトの中で平成19年から発案され、区長提案を行ってきた企画です。もともとは学校の空き教室を使って、中・高校生が交流できる空間＝居場所づくりができないかという発想からの企画です。今後はユース委員の希望を受けて、同世代間の交流を目的とするだけでなく、杉並という地域のさまざまな年代の人々と交流できる場を目指して、事業を展開していきます。

ユースプロジェクトすぎなみ事務局 中 みゆき
(杉並区児童青少年課青少年係)



“子どもによる子どものための活動”が日本で10周年

—活動 最初の一步

中島 早苗 (フリー・ザ・チルドレン・ジャパン事務局長)

子どもの権利条約ニュースレター第99号にて、“子どもによる子どものための活動が日本で10周年”というタイトルでご紹介頂いた団体フリー・ザ・チルドレン・ジャパンで事務局長をしています。活動を始めて、早11年目になりました。正直、このように10年も活動を継続するつもりで始めた訳ではなく、ほんの軽い気持ちで最初の一步を踏み出しました。

◆クレイグ少年との出会い

「僕たちは、児童労働の廃絶や子どもの権利保護のために、子どもが主体となって活動している国際的なネットワークです。」

1997年、当時アメリカのNGOに所属しインターンとして活動していた私は、ある1人の少年に関する記事を目にし、衝撃を受けたのを今でも覚えています。そこには、フリー・ザ・チルドレン (Free The Children 以下FTC) という国際協力団体を若干12歳で設立した「クレイグ・キールバーガー」少年と団体についての紹介がありました。「子どもが子どものために」という理念で活動している点に驚くとともに、果たして子どもができることは限られているのではないのか、という活動への疑問も浮かんだのは事実です。しかし、記事を読み進めていくうちにその疑問は徐々に消え、大きな感動に変わっていきました。

クレイグはある朝新聞で、児童労働廃絶に向けて活動していたパキスタンの少年「イクバル・マシー」君がわずか12歳で殺害されたという記事を読み、大きなショックを受けたそうです。なぜなら、イクバル君は4歳のときに人身売買の被害に遭い、10歳で救出されるまで奴隷のようにじゅうたん工場で働かされていたからです。学校にも通えず遊ぶことも許されず働いていました。同い年の少年が強制的に働かされている現状や結果的に殺害されたことを知り、子どもとしてこの問題を見過ごすわけには行かないという思いから児童労働について調べるようになります。そして、「子どもの問題なら子ども自身が関わって解決していくのが望ましいのでは」と考えFTCを設立しました。クラスメートなどに呼びかけ人数を集めた小さな少年たちによるグループとして始まりました。

◆フリー・ザ・チルドレン・ジャパン (FTCJ) の誕生

私は、このFTCの活動を知った直後、応援メッセージを送るためFTCにメールを送信しました。すると後日返信が来て、「日本の子どもにも輪が広がるといいです。」とかかれておりましたが、その時は自分で紹介しようとは思いませんでした。日々が過ぎ、ある日、アメリカにやってくる留学生を対象に英語を教えているアメリカ人の友人と色々話しをしていると、「日本人はなぜ、ささない限り自主的に発言しない

のかしら？」と聞かれました。日本人の生徒が人前で意見を表明しないことに不満気でした。その友人に続き他のアメリカ人の英語教師数名も「そうそう！日本人は意見を言わないから、何を考えているのかわからない」とその話題で盛り上がり、私は日本人として寂しく、また、悔しい思いをしました。日本人は人前で意見を言うのがあまり得意ではないかもしれませんが、何も考えていない訳ではないという気持ちがありました。しかし、自分を振り返ると、確かに学校教育の中でディベートや、意見を戦わせたという経験があまり思い浮かびません。日本では、協調性を重んじるばかりに違いを尊重するという教育が育っていないのではないのか。もし、日本でも早い段階から、個々の違いを認め合い意見を尊重しあうことが大切という教育が根付いていたら、もっとより良い社会になるのではないのか、と思いました。

このようなやり取りを通し、頭の片隅にかろうじてあったFTCの活動を思い出しました。FTCを設立したクレイグは、国連で採択された「子どもの権利条約」の存在を知り、自分たちの活動や理念の精神的なバックボーンになっていることを気づくようになったといえます。「子どもの参加の権利では、子どもがある目的を持って集まり、自由に意見を表明する権利が認められています。むしろ、子どもだからこそ意見を聞いてもらえる機会もあり、子どもにしかできないことは沢山あるのです。」という彼の言葉を思い出し、FTCを日本に紹介することで、日本の子どもが自らの考えが何かを見出し、子どもの声を聞くことができる社会になるよう環境を整え、子どもが発言しやすい場を創ることができるのではないのか、という思いもあり、フリー・ザ・チルドレン・ジャパン (FTCJ) を仲間とともに始めることにしました。

FTCJを設立したものの、おとなばかりで始めたために、肝心の活動する子どもたちがなかなか見つかりませんでした。しかし、様々なイベントなどを通し、ようやく設立から1年ほどで自主的に立ち上がる子どもたち(高校生)が現れ、今は300人程の活動する子どもメンバーがいます。こうして、日本でもFTCJの活動は徐々に広がり、気がつけば10年が経ちました。今思えば、私にとって活動への扉を開くきっかけとなったのは、雑誌で読んだクレイグ少年の記事でした。それは、ほんのちょっとした出来事で、冒頭にも述べたように当初から組織運営を念頭において活動をはじめたわけではありませんが、団体の二つの目的である「貧困から子どもを解放する。」「子どもには力がないという考えから子どもを解放する。」が達成されるまで、もうしばらく活動を続けざるを得ないかなと思っています。

国際社会から見た日本の子どもの権利条約の実施

—国連・子どもの権利委員会による第3回日本報告審査—

荒牧 重人

さる5月27日・28日、国連・子どもの権利委員会で、日本における子どもの権利条約の実施状況について審査がなされた。条約については、第3回目の審査である（第1回＝98年、第2回＝04年）。武力紛争と児童の買春・ポルノに関する2つの選択議定書については、初めての審査である。

日本政府代表団は、上田秀明人権大使ほか、外務省・内閣府・法務省・文部科学省・厚生労働省・防衛省・警察庁から総勢22人が出席した。一方、120人を超えるNGO関係者が傍聴につめかけた。

当日の審査は、子どもの権利委員会委員18人を2つに分け、チェンバーBの9人で行われた（議長はスイスのチェルマッテン委員）。審査は、27日午前、午後、28日午前の3会合9時間。

審査の冒頭で、上田大使が新政権の目玉施策である子ども手当の創設、高校教育の実質無償化、子ども・子育てビジョン、子ども・若者ビジョン等の取り組みについてステイトメントを読み上げた。

その後、質疑に移り、条約については、条約の一般的実施措置、差別の禁止や最善の利益等に関する一般原則、子どもの定義、市民的権利という4つの分野で多様な問題について質疑がなされた。続いて、家庭環境・代替的養護、基礎保健・

福祉、教育・文化、少年司法等の特別な保護措置という4つの分野で、やはり多岐にわたる問題について質疑がなされた。

翌28日には、選択議定書の実施状況に関する審査が行われた。前半は子どもの売買・買春・ポルノに関する選択議定書について、後半は武力紛争に関する選択議定書について質疑がなされた。

質疑は委員が質問をまとめて行い、政府（関係省）がまとめて回答するという形で行われ、政府の回答に対して委員がさらに質問を行い、政府が回答した。政府の回答は、ほとんどが政府報告書や追加回答書に書かれていることであったり、質問に的確に対応したものではなく委員に誤解を与えかねないようなものであったりして、「建設的対話」にはなかなかならなかった。

今回の審査に基づいて「総括所見」（懸念や勧告）が6月中旬に出される。これまでの日本政府は、2回の総括所見に対し、誠実に応答しているとはいえないし、実際にほとんど実施されていない。第3回目の総括所見も同じような道をたどることのないよう、NGOとして、今回の審査や総括所見を検討し、フォローアップするとともに、日本政府に国会議員やNGOを含めた審査のフォローアップシステムを構築するよう、引き続き要請していきたい。

国連子どもの権利委員会審査報告会

日 時：2010年6月20日（日）13：30—16：00（13：00受付開始）

場 所：早稲田大学戸山キャンパス39号館第7会議室

主 催：子どもの権利条約ネットワーク

報告者：荒牧重人さん（NCRC副代表・山梨学院大学法科大学院教授） 平野裕二さん（NCRC運営委員・ARC代表）

会 費：おとな 1000円（会員800円）18歳未満 500円（子ども・学生会員無料）

※先着40名、事前にメール・電話等でお申し込みください。

編集後記

気づいたらこのニュースレターも100号に達しました。去年は子どもの権利条約が成立して20周年、私たち「子どもの権利条約ネットワーク」もとうとう来年で20年の佳節をむかえます。この間、はたして条約は日本の人々のあいだにどのように普及し、受け入れられてきたのでしょうか。子どもの権利に対するバックラッシュなど、まだまだ厳しい現実もあります。しかし、それに負けじと草の根で活動を展開している多くの子どもたちや、それを支える団体が社会のいろんなところで輝いていると思います。100回のニュースレターは毎号、そんな人たちの努力や発見、その成果や歓びなど、様々な人たちの声に支えられて発行されてきました。そして、時にそれは子どもたちの意見表明のひとつのプロセスになることもありました。今回の100号にも子どもたちやそれを支える団体が登場し、実りあるものになりました。今後、このニュースレターを通してたくさんの子どものベスト・インタレストに光をあてていければうれしいです。

なお、100号記念の別冊とし、条約の普及を支えるツールを作成することになりました。そのため、通常12ページ構成のところを今回は8ページにしています。現在作成を進めているので後日、その報告もしていければと思います。

(Y・N)

「子どもの権利条約」No.100

2010年6月15日発行

★発行（季刊・年4回）

子どもの権利条約ネットワーク

Network for the Convention on the Rights of the Child

〒152-0034 東京都目黒区緑が丘2-6-1

TEL&FAX 03-3724-5650

Eメール info@ncrc.jp

ホームページ <http://www.ncrc.jp/>

★発行人 喜多明人

★編集人 岸畑直美・南雲勇多

★年会費 5000円 学生 3000円

18歳未満 1000円

*郵便振替 00180-2-750150

★印刷 (株)第一プリント